

●能・狂言：日本の「もうひとつの」宮廷音楽

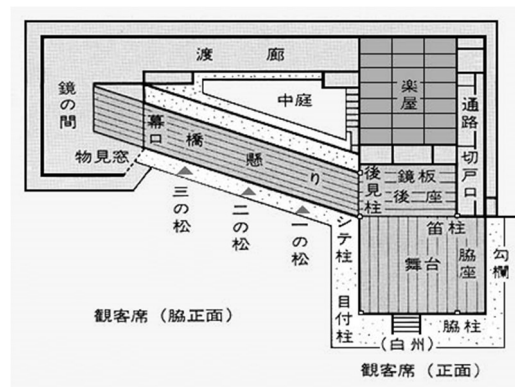
a) 能

能(のう)：正しくは猿楽能。南北朝・室町時代に観阿弥・世阿弥父子が将軍足利義満の保護を受けて大成した歌舞劇で、江戸時代は幕府の式楽として栄えた。舞(まい)と謡(うたい)と囃子(はやし)の三要素から成り、囃子は笛・小鼓・大鼓・太鼓の四楽器で奏される。
特徴：シリアス、神話・伝説が題材、歌舞劇

b) 狂言

狂言(きょうげん)：日本の伝統芸能の一つ。室町時代に成立。能楽と一緒に行われるが、舞踏的・象徴的な能と異なり、物まねの要素や写實的な科白(せりふ)劇の性格をもつ。
特徴：コミカル、日常が題材、せりふ劇

c) 能舞台



例 1: 能「羽衣」

(DVD「日本の伝統芸能の魅力 能・狂言」より)

羽衣(はごろも)：能の演目。漁師白竜は三保の松原の松に不思議な衣をみつけて持ち帰ろうとする。そこへ天人が現れ自分の羽衣なので返してほしいと懇願されて衣を返す。天人はその礼に舞を舞って昇天する。



例 2: 狂言「居杭」

(DVD「日本の伝統芸能の魅力 能・狂言」より)

居杭という少年が、清水観音で頭にかぶると姿の消える頭巾(ずきん)を手に入れ、二人の大人をからかう。

例 3: 狂言「棒しばり」

(DVD「野村万作・萬斎『狂言でござる』 野村万作狂言集 第三巻」より)

主人が留守のあいだ勝手に酒を飲まれぬよう、主人は太郎冠者の手を棒にしばりつけ、二郎冠者の手は後ろ手にぐるぐる巻きにする。二人はその状態でも何とか酒を飲もうと工夫する。



例 4: 狂言の修行

(NHKドキュメンタリー『野村萬斎我が子を鍛える』より)

今や立派な若手狂言師に成長した野村裕基が3歳の頃のドキュメンタリー。野村家では代々子供が3歳になったときに『うつぼ猿』という演目で猿を演じて舞台デビューすることになっている。指導するのは祖父、野村万作の役目なのだが、父萬斎もなかなか厳しい。